

パステルの淡き色彩削りつつキタイスカヤの猫を思へり
野原垂莉子

「キタイスカヤ」という珍しい地名が出てくるところがポイント。これが一首の空気を支配している。キタイスカヤは現在は中国ハルビン市の都市だが、かつてのロシア統治時代の中国人街。ロシア語で「中国人街」の意という。ここでは淡い色彩から連想されるなんとなくノスタルジックな街の空気が、読者の心に広がる。

地にセキレイ裸木の林へ四十雀空の高さを味はひて
白岩裕子

三種の鳥を登場させて、それぞれの鳥の個性をさり気なくうたつて楽しい。若山牧水が一時、多種類の鳥を一首に詠み込む試みを楽しんで、最高四種もの鳥を一首に詠み込んだりしていたのを思い出す。

腐りたるエアープランツ捨てるとき死とは放物線としてある
佐佐木定綱

「エアープランツ」という新しい観賞用植物を登場させた一首。詳しくは知らないが、土のいらぬ園芸植物として、ぶら下げたり、机の上にただ置いたりできるので、いま人気らしい。新しい題材に挑戦して、死を日常の視線の外側に置いて見せた力技。

雲たちが形に意味を持つように良いことだけを日記に綴る
増田満美子

空一面の雲には形がないが、浮き雲には形がある。日記に書かなければ形はないが、書けばその日の出来事に形ができる。そう思って、良いことだけを日記に書く

短歌の現在

No.456

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

いうのだ。なるほどと感心した。書いておけば、十年経っても二十年経っても形が残る。なるほど。

ふりだしに戻る一月玄閏に家族の靴を次々磨く
佐藤モ二カ

新年になっての感じを、「ふりだしに戻る一月」とする表現は、ありきたりのようで、じつはあまり見ない気がする。古代日本には「新しい」という語がなかった。それに当たる語は「あらためる」だった、ということはお存じだろう。そんな古代的感觉を思い出させて楽しい。

列車には乗ることのなき人ばかりホームに多し餘部
の駅
青山 仁

むかし餘部橋梁は高さ四十一メートルもの鉄橋として有名だった。しかし、風に弱く、事故などもあり、その上耐用年数の関係もあって、二〇一〇年に新橋に掛け替えられた。その折ファンが多かった旧橋を中心に観光用に整備。現在は余部鉄橋「空の駅」展望施設となっている。不思議な観光駅をドキュメント風にうたった一首。

ラップロールにやつと見つけた切り口がカゲロウの羽のように儂い
西村すみこ

日常生活のささいな部分にそっとスポット当てて見せた一首。「かげろうの羽」という比喩がやや古風な感じがしないでもないが、デリケートな事物にだれも注目しない昨今の空気に異をとなえているようで、嬉しい。

思い出はふたつみつほどあればよく雪の地蔵も心に撮る
丸山 稔

誰ですがすぐにスマホを向けてシャッターを切る、そ